

シリーズ「岩手の再生」第8集

ロシアとウクライナとポーランド ～その歴史的関係～

岩手大学 梶 さやか



NPO 法人岩手地域総合研究所

シリーズ「岩手の再生」第8集

ロシアとウクライナとポーランド ～その歴史的関係～

岩手大学 梶 さやか



NPO法人岩手地域総合研究所

表紙写真

一面に咲くひまわりの花

ロシアが侵略を始めた当初、ウクライナの婦人が機関銃を持ったロシア兵に対し、「あなたはここへ何をしに来たの、あなたがここで死んだ時、ヒマワリが育つようにこの種を持って行きなさい」とひまわりの種をポケットに入れるよう促しました。

この動画がウクライナ全土に広まり、ひまわりの花はウクライナ抵抗のシンボルとなりました。

『ロシアとウクライナとポーランド』 ～その歴史的関係～

目 次

『発刊にあたって』

岩手地域総合研究所理事長

井上 博夫 …………… 1

I 連続講座「岩手の再生」

講座 「ロシアとウクライナとポーランド～その歴史的関係～」

岩手大学人文社会科学部 准教授

梶 さやか …………… 2

講師紹介

梶 さやか (カジ サヤカ)

【経歴】 京都大学大学院修士課程修了

ポーランド・ワルシャワ大学研究員

(現) 岩手大学人文社会科学部准教授

【専門】 ヨーロッパ史

【学会】 史学研究会、日本西洋史学会、

東欧史研究会、ロシア史研究会など

【著書】 『ポーランド国歌と近代史— ドンブロフスキのマズレク』

2016年、群像社。

『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題—ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』 2017年、ミネルヴァ書房 (共著)

『ポーランドの歴史を知るための55章』 2020年、明石書店 (共著) など

シリーズ「岩手の再生」第8集の発刊にあたって

岩手地域総合研究所・理事長
井上 博夫



2022年2月、ロシアは「突然」ウクライナへの侵攻を開始した。2014年の政権交代後、クリミア「併合」とウクライナ東部地域での紛争が続いていたとはいえ、国連発足時からの加盟国であるウクライナをロシア正規軍が「堂々と」侵略したことは、私にとっては驚きだった。

また、日本政府も安全保障政策の大転換を意味する防衛三文書の改定をバタバタと進め、大軍拡への道を歩み始めた。そこでの世界観は、現代を「普遍的価値を共有する国家」と「共有しない国家」が対立する世界と捉え、価値を共有する同盟国・同志国の連携強化と自国の防衛力強化（反撃能力を有し、非対称的な優勢を確保）によって「インド太平洋地域における現状変更」を抑止する、という極めて一面的で短絡的なものだ。「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しよう」と決意した」戦後日本国憲法体制の世界観から大きく外れようとしているといわざるを得ない。

そうした情勢のなか、2022年度の連続講座「岩手の再生」は、「ロシアによるウクライナ侵略と日本の平和・安全保障」をテーマに3回の講座を開催した。その際の意図は、軍事情勢の分析に偏るのではなく、ロシア・東欧や日本と周辺諸国の歴史、そして日本国憲法と安保の問題を客観的に眺める中で、今日の状況を考えてみようというものだった。

連続講座は次のとおりだった。

第1回 ロシアとウクライナとポーランド ～その歴史的関係～
(梶 さやかさん)

第2回 ウクライナ・ロシア戦争とロシアの文化 (麻田雅文さん)

第3回 ロシアとウクライナから考える日本の平和・安全保障 (本庄未佳さん)

いずれの回も、会場とリモートのハイブリッドで開催し、多くの参加を得ることができた。ただ、諸事情により、本ブックレットには第1回の講演と討論のみを収録させていただいた。

2022年度連続講座「岩手の再生」第1回講座 2023年1月21日(土)
「ロシアとウクライナとポーランド～その歴史的関係～」

講師：岩手大学人文社会科学部 准教授 梶さやか

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました岩手大学人文社会科学部の梶です。今日はこのような機会を与えていただきましてどうもありがとうございます。専門は西洋史で、特に19世紀のヨーロッパ東部のポーランドやリトアニア、ベラルーシ地域のナショナリズムを専門にしております。現在戦争が起きているウクライナとロシアは自分の専門に近い領域ですが、少しずれていますので、今日お話しする内容は、例えば現在の戦況であるとか、現状分析というようなものではなくて、もう少し歴史的な経緯を交えながら、戦争の背景にはどんなことがあるのかをお話ししていきたいと思えます。自分自身の研究だけではなく、他の研究者の研究成果も参考にしながら、お話ししていきたいと思えます。それでは、どうぞよろしくお願ひいたします。



最初に、地名の呼び方に関しましては、私がウクライナ語に精通しているわけではないこと、歴史上はウクライナ語以外の言語で呼ばれることもあったこと、現在もウクライナ語以外の言葉話す人々も一定数いることもあって、ウクライナ語表記には統一していません。慣例・慣用をベースに、時々ウクライナ語

表記になったり、ロシア語表記になったり、ポーランド語表記になったりしていると思えますが、その点をご了承ください。

(1) 境界地域としてのウクライナ

配布していただきましたレジュメに沿ってお話をしていきたいと思えます。適宜、前のスクリーンで図版を提示しながら進めていきたいと思えます。まず、地図1をご覧ください。これは現在のウクライナの地図で、『ウクライナを知るための65章』という本からお借りしてきたものです。ウクライナの国境は、クリミア半島や東部が現在ロシアの実効支配のもと

にあります。こうした地域を含めるとソ連崩壊時のソヴィエト・ウクライナの境界線と同じものです。つまり現在のウクライナを構成する諸地域がどういう経緯で一つに集まってきたかという、ソ連邦を構成する共和国の境界策定によるもので、それを引き継いでいるということになります。ウクライナはそれ以前にも非常に複雑な歴史を有し、そこに住む住民のエスニシティや言語、宗教の点でも多様な地域です。地域ごとの歴史的背景は、次ページの枠内にざっくりまとめていますが、あまりにいろいろな地域が集まっていますので、今日ここで話するのは、主にドニプロ（ロシア語・ポーランド語ではドニエプル）川の中流域ならびに西ウクライナと言われるところに限定します。つまり、ウクライナの中心部・首都キエフの辺りや、現在報道でも時々耳にする西部の中心都市リヴィウの辺りについて、その歴史を中心に話していきたいと思います。

地図 1：現在のウクライナ国家を構成する地域の多様性
 (服部倫卓氏作成：服部倫卓、原田義也編著『ウクライナを知るための65章』
 明石書店、2018年より)

ウクライナの位置と地図



作成：服部倫卓 〃 --- は歴史的な地方の大まかな領域を示す。

地域ごとの政治的帰属で見るウクライナの歴史的背景

- ・ドニプロ（ドニエプル）川中流域およびハーリチナ（西ウクライナの大部分）
スラヴ人、ペチェネグなどの遊牧民→キエフ＝ルーシの領域→リトアニア大公国／ポーランド王国→ロシア帝国／オーストリア帝国→ソヴィエト・ウクライナ／ポーランド→ソヴィエト・ウクライナ
- ・ドネツ川中下流域：スロボジャンシチナ、ドンバス
ハザールやその他の遊牧民→キプチャク・ハン国などのタタール系の諸国家→モスクワ大公国・ロシア帝国→ソヴィエト・ウクライナ
- ・黒海北岸の地域・クリミア半島
スキタイ、ギリシア植民都市→ペチェネグ、ハザール、その他遊牧民→タタール系の国家（キプチャク・ハン国→クリム・ハン国…オスマン帝国に臣従）・オスマン帝国→ロシア帝国→ソヴィエト・ウクライナ
- ・ブコヴィナ（ルーマニア系住民多い）
モルドヴァ公国→オーストリア帝国→ルーマニア→WWII でソヴィエト・ウクライナに
- ・ザカルパッチャ（ザカルパチア／ザカルパート）（ハンガリー系住民多い）
ハンガリー王国→チェコスロヴァキア→ハンガリー→WWII でソヴィエト・ウクライナに

まずウクライナという地域が、現在も昔もいろいろな境界線の上に成り立っている地域であるということからお話しします。この地域は歴史的に見ると、黒海北岸の遊牧民が住むステップ地帯と、その北側の農耕民の世界に、ドニプロ川などの河川を用いた黒海と北海の交易ルートが貫いている地域で、非常に古くからいろんな文明が混じり合ってきたところです。18世紀後半まで、南の、場合によっては遊牧民を含む、クリム・ハン国やオスマン帝国というイスラム教の文化圏と、西のポーランド＝リトアニアのカトリックを中心とするラテン文化圏と、東のモスクワ大公国、のちのロシア国家・ロシア帝国という東方正教のギリシア・スラヴ文化圏が、こ

の地域で境を接していました。ただ、このドニエプル川の下流域辺りは、18世紀後半に至るまで、実質的にどの国も明確に支配・管理・領有していない、無人ではないものの支配権が明確ではない、荒野・平原が広がる地域を含んでいました。このような領有権が明確でない荒野・平原をジキェ・ポーレ (Dzikie Pole) あるいはジコエ・ポーレ (Дикое поле) というふうに呼んでいます。こうしたところに、あとからご紹介するコサックのような勢力が登場します。

(2) 現代のウクライナの「東西の違い」

このように歴史的な経緯が地域ごとに非常に多様なウクライナですが、ウクライナが 1991 年に独立したあと、その多様性は主に西ウクライナ、つまりリヴィウなどを中心とする西部の方と、キエフなどの中央部、そしてドンバスなどの東部と黒海北岸の南部に区分されて、西側は親 EU・NATO 的、東側（南部を含む）は親ロシア的として特徴づけられることが多かったと思います。いま激戦地になっている地域も含めて、東部・南部の方にロシア語話者が圧倒的に多いし、経済的にもロシアとの結びつきが強い。正教会の信徒も多い。それに対して、西部の方はウクライナ語話者が多い。東方正教会の信徒もいるのですが、カトリック教会の信徒も多い（カトリック教会にも、この地域には 2 派ありまして、ラテン典礼、つまりローマから広がったラテン式の儀式を行うローマ＝カトリックと、ギリシアのコンスタンティノーブルから広まったけれども、そののちローマの教会と合体・合同したギリシア式の典礼を行うギリシア＝カトリック（合同教会）とがあります）。こういうかたちで、東部と西部では歴史的経緯の違いに由来する多くの差異があるわけです。そして、西部の方でウクライナ民族主義が強いという大雑把な区分けがありました。ただ、21 世紀以降いろいろな変化も登場しています。例えば、ウクライナ語の通用率は独立後増しましたし、それから 2014 年の開戦以降、ロシア語話者のあいだでもロシアとの経済関係やロシア文化への態度の変化などが出てきます。このように 21 世紀以降変化が著しいところではありますが、概観としてご紹介しました。

(3) 歴史政策

一般にはあまり馴染みがないかもしれませんが、歴史政策、あるいはメ

モリー・ポリティクス、記憶政策という言葉があります。歴史、とくに国民や民族などの集団が経験した出来事やその記憶を政治的に動員する政策を指します。それとかかわりが深い、アイデンティティ・ポリティクスと言われる、住民の、とくにナショナル・アイデンティティを喚起し、作り上げていく政策もあります。今日はこうした点、つまり「政治」が歴史をどのように利用してきたのかを中心にお話したいと思います。ロシア・ウクライナ・ポーランドは長らく隣国、少なくとも隣接する地域として、多くの事件を共有していますが、それぞれで解釈が異なることも多いです。その背景には、現代において、ロシアだけではなくて、ウクライナやポーランドでも、政府がそれぞれの立場で歴史を利用しているという問題があります。これが外交問題化・国際問題化することもあります。例えば、ロシアの歴史政策やアイデンティティ・ポリティクスは、2022年2月のロシアによるウクライナへの大規模侵攻の口実にも繋がっているし、その前年の21年6月にプーチンが出したロシア人とウクライナ人の歴史的一体性についての論文にも現れているところです。これに関しては多くの論点があるのですが、時間と私の能力の都合上、以下では、古代・中世のキエフ＝ルーシの問題、近世のコサックの問題、ホロドモールなどのソ連時代の問題、そして第二次大戦前後に活動したOUN・UPA(OUN・ウパ)と呼ばれるウクライナ民族主義者の問題の4点についてお話をしていきたいと思います。

1. 「ルーシの三兄弟」——キエフ＝ルーシの位置づけ——

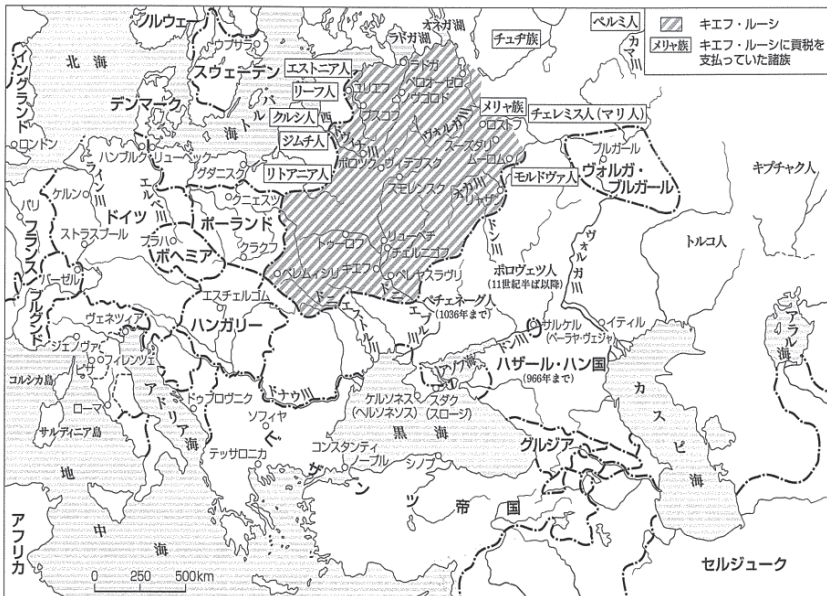
(1) キエフ＝ルーシの歴史——概観——

まずキエフ＝ルーシについてお話しします。しばしば「ルーシの三兄弟」として、ロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人が非常に緊密な関係にあることが、プーチンに限らず、多くの人々の間で、また長らく、想定されてきました。その想定は何にさかのぼるかという点、9世紀以降、キエフやその周辺に存在したキエフ＝ルーシにさかのぼるわけですが、じつは、キエフ＝ルーシの領域がウクライナ全体、いわんや東スラヴ全体を含むような広がりを持っていたわけではありません。その支配領域については諸説ありますが、黒海北岸までは及んでいないし、ウクライナの東部にも及んでいません。これをふまえたうえで、以下ではキエフ＝ルーシの歴史の概略を述べていきます。

9世紀後半に北方のノルマン系と思われるリュウリクが一族を率いて最初にノヴゴロドを建国し、その後、彼の子孫たちがキエフに拠点を移して、そこで支配を固めたとされます。キエフに中心的な公（大公）を置いて、その下に東スラヴの諸部族の連合体を束ねるような国家を築きました。とくに重要なのが、10世紀にキエフ大公ウラジーミル、ウクライナ語ではウオロディミルが、ギリシアからキリスト教を受容して正教会のキリスト教徒になり、それがきっかけでキエフ＝ルーシの配下にあったスラヴ人たちが東方正教のスラヴ人になったことです。ただ、キエフ＝ルーシはほどなく分裂していきます。そもそも諸部族の連合体で地域的な差があったことに加えて、大公の息子たちによる分割相続もあって、ウラジーミルの孫の代くらいになると大公の一族の男性がおさめる別々の公国に分裂していきます。これを分領公国化と呼びます。こうした分領公国は一応キエフ大公の下に置かれますが、大公の権威は下がり、分裂する傾向が出てきます。

地図2：10-11世紀におけるキエフ＝ルーシと近隣諸国
（国境は11世紀半ばのもの）

（和田春樹編著『新版世界各国史 ロシア史』山川出版社、2002年より）

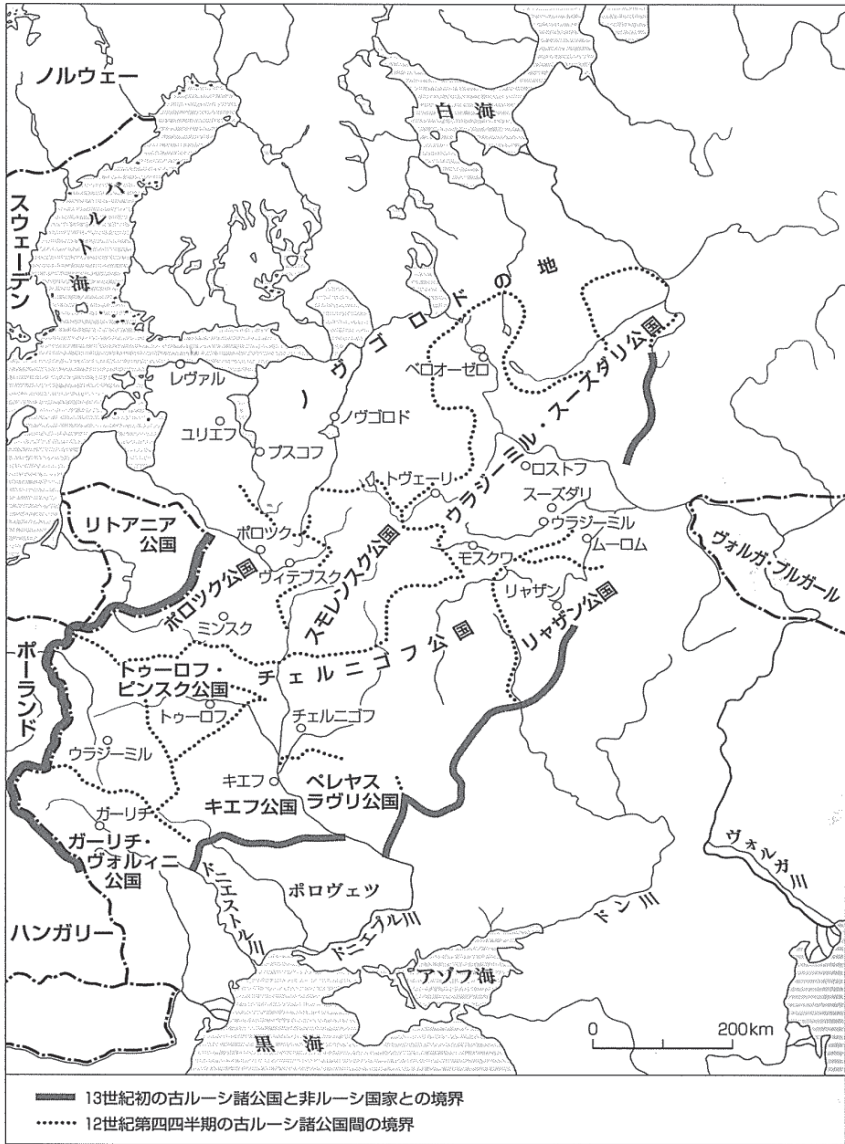


その中でキエフから北東部にだんだんと人が移動・移住していきます。11世紀の終わりから12世紀の初めに、キエフから見て北東部の地域、都市ウラジーミル、スズダリ、モスクワなどがある地域に人が移っていきます。何世代か分裂を繰り返すなかで血族意識やキエフ大公への忠誠心が薄れて、各地の公が相争う状況になります。その中で北東部の公のなかには、キエフを略奪するだけ略奪して、キエフの大公位を手に入れようとしないうも出てきて、だんだんキエフやその周辺が荒廃していきます。

そうした状況下の13世紀前半、東からチンギス・ハンの孫のバトゥの大遠征があってモンゴル・タタール軍が侵入し、キエフが決定的に荒廃しました。北東部のウラジーミル、スズダリ、モスクワ（後のモスクワ大公国）などの地域も、モンゴル・タタールの支配下に置かれることとなります。その中から、のちにモスクワの公が頭角を現し、モスクワ大公として北東部を統一し、「タタールのくびき」からも独立し、ロシア国家へと発展することとなります。また、元来、キエフに正教会の中心である府主教座があったのですが、キエフの府主教たちは荒廃したキエフを避けて、自ら望んで北東部に移動してしまいます。1299年にウラジーミルに移り、そして最終的にモスクワに移ります。モスクワに移ったキエフ府主教座が、独立したロシア正教会のモスクワ総主教座としてギリシアのコンスタンティノーブルの総主教庁から正式に認められるのは1598年を待たねばなりません。こういうかたちで東スラヴの中心地のひとつがモスクワにできます。

地図3：12-13世紀初めのルーシ

(和田春樹編著『新版世界各国史 ロシア史』山川出版社、2002年より)



ロシアの歴史叙述では、キエフ大公の権威の低下、キエフの荒廃、府主教座の移転などをもってルーシの中心地がモスクワに移ったと言うわけですが、ウクライナの歴史学では別の見方をしています。13世紀、南西部にも栄えた公国がある、それが、ハリチ・ヴォルイニ公国（ウクライナ語。ロシア語表記に基づいた地図3ではガーリチ・ヴォルィニと書かれています）だという主張です。この辺りは比較的早くにモンゴル・タタールの支配を脱して、14世紀にかけて発展しますが、1340年にリューリクの血を引くハリチ・ヴォルイニ公の男系子孫が途絶えてしまうことで、一部はポーランド領に、残りはリトアニア領に入りました。その後、リトアニア、いまはバルト三国の一番南の比較的小さい国ですが、当時のリトアニア大公国は非常に大きな国でして、そのリトアニアがキエフ＝ルーシの北東部を除くほとんどを領有することになります。次の地図は中世リトアニア大公国の版図拡大の過程を表した地図です。左上がバルト海で、右下に見えているのが黒海、リトアニアの西隣が当時のポーランド王国で、北東の隣国がモスクワ大公国です。リトアニアの首都ヴィルニウスはここで、キエフがここです。これは、リトアニア大公国の領土が一番大きかった頃の地図ですが、こういうふうに見ると、じつはキエフ＝ルーシの領域が、モンゴルの侵入後、全部モスクワの領土に移ったということでは決してないのです。さらにポーランドもリトアニアもカトリックを国の宗教としていたこともあって、両者の領域に入ったキエフ＝ルーシの末裔の公国はカトリック世界の影響を受けることになります。そういう点で、キエフ＝ルーシのその後の展開には地域差が非常に大きいのです。

地図4：13-15世紀のリトアニア大公国の拡大
 (アルフォンサス・エイディンタスほか『リトアニアの歴史』
 明石書店、2018年より)



(キエフ＝ルーシの分裂・内部の相違)

このように、キエフ＝ルーシの領域の内部はとても多様でした。一元的な国ではなかったですし、各地に異なる部族がいたというふうに使われています。建国後比較的すぐにキエフ＝ルーシは分裂して各地にいろんな公国ができます。一方で、キエフやモスクワの府主教、モスクワの大公、それからモスクワ大公とルーシの地を争ったリトアニアの大公などの称号

には、キエフ＝ルーシの一体性を理念化したような称号が長らく使われま
す。教会の方から言いますと、モスクワに移ってから数世紀を経たのちも、
モスクワの府主教は正式には「キエフと全ルーシの府主教」という称号を
名乗り続けます。府主教というのは当時の正教会の中でコンスタンティノ
ーブルの総主教に次いで位の高い聖職者ですが、その府主教、要は東スラ
ヴ地域の正教会のトップに当たる人が公式には 15 世紀後半までキエフの
府主教を名乗り続けるのです。世俗の君主の称号についても、旧キエフ＝
ルーシの範囲のうち、北東部しか統治していないモスクワ大公が、ゆくゆ
くはキエフ＝ルーシ全域を統合する目論見を込めて「全ルーシの君主」と
名乗ります。元はルーシの国でなかったリトアニア大公国も、ルーシの後
継国家の多くを手中に収めて、この地域の覇権を握りたいので、リトア
ニア大公という称号とともに「ルーシの君主」という称号を名乗る者も現
れます。また、リトアニア大公も自分たちの支配領域にある正教会のトップ
として独自のキエフ府主教座を作る試みを何回も行っているのです。そう
いう意味でキエフ＝ルーシは非常に多様な領域ですが、称号を見ると、キ
エフ＝ルーシの統合・統一という理念がある程度継続して反映されている
ということも言えます。

とはいえ、モンゴル・タタールの襲来、そしてリトアニア大公国による
支配の浸透以降、キエフ＝ルーシだった地域の多様性は一層増していきま
す。モンゴル・タタールの支配が長かったモスクワなどの北東部は正教圏
にとどまった一方で、ラテン・カトリックの影響が強いポーランド＝リト
アニアに入ったルーシの地域（現在のウクライナやベラルーシに相当しま
す）は、強制的なカトリックへの改宗の動きはなく、多くの正教徒を含ん
だままでしたが、カトリック優位の社会の中でその影響を受けることにな
ります。のちに、この地域が東西両教会の混住地、境界域、混交域になり、
ロシアとは異なるベラルーシやウクライナの特徴をもたらすことになり
ます。

（そもそもルーシとは）

言葉の意味に移りますが、じつはポーランド語やウクライナ語、ベラル
ーシ語、あるいは中世・近世のこの地域で使われていた言葉では、ポー
ランドやリトアニアの国の中にいる正教徒のスラヴ人をルーシ人、その人々
の住む地域をルーシ、そしてその言葉をルーシの言葉、ルーシ語という
うに呼び、現在もそう呼んでいます。ルーシという語がキエフ＝ルーシを

指すこともあります。同じ正教徒で、キエフ＝ルーシの歴史を受け継いでいる北東部のモスクワ大公国やその住民は、ルーシに含まれないことが多く、現在のロシアに相当する地域の住民は、当時はモスクワ人と呼ばれていました。もちろんここを含めてルーシと言わないこともないのですが、多くの場合にポーランド＝リトアニアの中の正教徒をルーシ人、その外のモスクワの正教徒はモスクワ人と区別していたわけです。

他方で、ロシア語、少なくとも現在のロシア語では、エスニシティとしてのロシア人、ロシア語を話す正教徒のロシア人という意味で「ルーシ Русь」という語を用います。ロシア帝国のような多民族の国家、政治的まとまりとしてのロシアの場合は、「ロシア Россия」という別の単語を使い分けますが、エスニシティとしてのロシア人にルーシの語を用いるため、近代以降のロシアと前近代のルーシの区別は曖昧です。しかも、帝政期のロシアでは、大ロシア人・小ロシア人（ウクライナ人）・白ロシア人（ベラルーシ人）の3部分からなるルーシ（すなわちロシア）人を想定していました（歴史的には、ロシア本土を大ロシアと呼ぶのに対して、南のウクライナを小ロシア、そして西の部分を白ロシアと呼んでいました）。この大ロシア、小ロシア、白ロシアが一体のロシア人＝ルーシ人を構成しているというのが帝政期の公式の見解であり、別々の民族だけれども緊密に結びついているというかたちで、ソ連時代以降現在まで、受け継がれています。

（ロシア、ウクライナ、ベラルーシの地域的まとまりも後世に登場）

このように、ロシアが、キエフ＝ルーシから繋がるロシアの歴史やルーシの三民族の一体性を主張するのに対して、ウクライナは、キエフなどのルーシ諸公国はロシアとは違うという点やモスクワに回収されないハリチ・ヴォルニニ公国の存在を強調します。ちなみにベラルーシは、キエフ＝ルーシ全体というよりはそのうちの北西部のポロツクやトゥーロフという公国が自分たちの起源だと言います。ただし、どれが正しいかという問題ではありません。どういうことかという、ロシアも、ウクライナも、ベラルーシも、キエフ＝ルーシ当時の政治的なまとまりではありません。地域的まとまりとしても、あるいは民族・ネイションとしても、いずれも、16世紀以降に登場するものです。ロシアは、一応モスクワ大公国からロシア・ツァーリ国家、ロシア帝国というふうに政治的な組織が連続していますが、途中でその姿は大きく変化しました。ウクライナやベラルーシに関

しては、16世紀に両者の差異が大きくなり、それぞれの地域的なまとまりを構成し始めますが、19世紀半ばまでは、民族名や行政単位になったことはなく、地理的名称でした。しかも、当時の地理的名称としてのウクライナやベラルーシ（または、白ロシア）は、いまのウクライナやベラルーシと異なる、より狭い範囲を指していたのです。そういう意味で歴史研究の立場から見ると、どの国でもキエフ＝ルーシにそのまま自分たちの歴史をさかのぼらせて書くというのは、フィクションを交えて書いていると言えるかと思います。

(2) キエフの歴史的位置づけ

いま私は、ロシア史の中でキエフ＝ルーシがロシアの始まりとして描かれたり、キエフがロシア史の中で重要な位置を与えられていたりしているとご紹介しましたが、じつはこれもそれほど正確な紹介の仕方ではありません。どういうことかと言いますと、しばしば「ルーシ諸都市の母」として言及されるキエフが、常にロシアの、あるいはロシア史の一部と認識されていたわけではないということです。キエフはロシア史の中で長らくさほど重んじられていなかったのです。

まず、その後キエフがどんな経過を辿ったかと言いますと、12世紀以降、ユーリー・ドルゴルーキーなどの北東部に拠点を構えていたルーシの公によって略奪の対象になり、たびたび襲撃されます。その後、モンゴルの来襲に遭って決定的に荒廃し、しばらく廃墟というか、地方都市でさえもないような荒れ果てた状態のまま放置されます。17世紀にコサックがここを復興して、キエフはカトリックのポーランド＝リトアニア国家の中の正教会の中心地になり、(モスクワのキエフ府主教座とは別の)キエフ府主教座も置かれます。あとでお話しするように、1667年、ポーランド＝リトアニアとロシアの戦争の結果、アンドルソヴォ条約という両国間の国境を定めた条約によって、キエフはコサックの国家とともにロシア領になります。

その後、ちょうど17世紀の後半から18世紀にかけて、アレクセイ帝やピョートル大帝の治世に、ロシアが西洋化して列強の中に入っていこうとする時代が来ます。その時に、キエフやその周辺のウクライナの正教会の聖職者やその他のエリートたちは、ロシアと同じ正教徒であるものの、先に既にラテン・カトリックの文化に馴染んでいたもので、ロシアの西洋化を

担う人材として中央で活躍するようになります。とくにキエフには、正教圏初の高等教育機関であるキエフ・モヒラ・アカデミー（1632年の設立当初はコレギウム）が置かれ、正教会の学校であるにもかかわらず、カトリックのイエズス会の教育システムがそのまま導入されていました。ラテン・カトリック的な教育システムを通して、カトリック世界で通用する教養を持った人たちを輩出していました。こうした、早くから西洋化した、先進的なキエフの聖職者やコサックのエリートたちが、ロシアの西洋化の過程で活躍するようになります。そして、自分たちの都市であるキエフをロシアの歴史に位置づけていこうとする人たちが聖職者の中から登場し、後々のロシア史認識の基礎を形作るようになります。

（ロシア史におけるキエフ）

18世紀終わりから19世紀にかけて、ロシアの歴史を書こうという試みが登場してきます。その中でだんだんとキエフの重要性が増していきます。18世紀の後半に生まれ、19世紀前半まで非常に大きな影響力を及ぼしていた歴史家にニコライ・カラムジンがいます。ロシア史を最初に形作ったのが、このカラムジンだと言われています。しかし、カラムジンは、じつはあまりキエフは重要視していないと言われています。カラムジンは国家の歴史としてのロシア史を書くので、キエフ＝ルーシから中心がモスクワに移った、そのモスクワの支配からキエフが離れてリトアニアの支配下に置かれた、キエフがリトアニア大公国領、のちポーランド王国領になった、そうしたらもうキエフはロシアではない、と考えました。その後の時代について、彼はモスクワ中心のロシア史を描いていくので、あまりキエフは重要視されません。これに対して、次の世代の歴史家、つまり19世紀半ばに影響力を持つミハイル・ポゴージンやニコライ・ウストリャーロフという歴史家らは、ロシアの歴史はロシア人、つまり、ルーシの人々の歴史だというふうに解釈を変えるのです。キエフ周辺の南西部、リトアニア大公国などの北西部は、19世紀当時もポーランド貴族の影響力が強く、ロシアのエリートや知識人の間でも、ここがロシア（ルーシ）だという意識はあまりありませんでした。しかし、ウストリャーロフらの研究やその主張によって、リトアニアの中に入っても、ポーランドの中に入っても、そこに住んでいたのはルーシの人たちだ、正教徒のスラヴ人だ、だからその地域もロシアの歴史の一部を占めているのだと解釈が変わり、ロシア史の範囲がぐんと広がっていきます。おそらく、これは当時のロシア帝国の範囲

をロシア史に組み込むのにとっても都合が良い、当時の政治的状況とよく合致した歴史認識でした。ただ、それを進めたのはポゴージンやウストリャーロフなどのロシア中心部の歴史家だけではありません。ミハイロ（ミハイル）・マクシモヴィチなどのキエフ大学やその周辺の歴史家たち、いまのウクライナ、つまり当時の小ロシアの知識人たちからも、自分たちの居場所をロシア史の中に作るべく、ロシアの源流としてのキエフのイメージが作られていったことが指摘されています。キエフは、ロシアの正教の歴史が始まったところであり、その後、モンゴルの来襲や、ポーランドやリトアニアの支配があっても、そこは無人の荒野になったのではなく、古来の正教徒のスラヴ人が常にくらしていたのだというかたちで、キエフをロシア史の中に位置づけていきました。ですから、一見するとロシアの膨張的な拡大に伴ってキエフがロシア史の中に入るのかなと思われるかもしれませんが、意外と単純ではなくて、キエフの知識人たちが、ロシアの中に自分たちの居場所を確保するためにキエフをロシア史の中に入れていくという面もあったということなのです。

2.ウクライナのシンボルとしてのコサックの多義性

(1) コサック

ウクライナのナショナリズムの中でコサックはとても重要なシンボルですが、これも意外に複雑だということをお話しします。コサックがどういふ人たちかといいますと、早く見積ると15世紀、あるいは16世紀に、ポーランド、リトアニア、オスマン帝国、モスクワ大公国、のちのロシアなど、各国の実効支配が及んでいない辺境地に出現した、武装した自由の民です。のちにロシア領となった地域にもドン・コサックやヴォルガ・コサックという集団がありますが、ここから先は、いまのウクライナの領域に出てきたザポロージェ・コサック（ドニエプル・コサック）を中心にお話をしていきます。

コサックには、逃亡してきた農奴を中心に、罪人、あるいは貴族など、いろいろな出自の人が雑多に集まってきました。つまり、通常の身分制度の枠組みからはみ出た集団がコサックです。図のようなイメージで19世紀の有名なロシアの画家、イリヤ・レーピンが描いています。「スルタンに手紙を書くザポロージェのコサック」という絵画で、オスマン帝国から臣従を求められても、そんなもの認めるものかと、スルタンを馬鹿にする手

紙をみんなでワイワイガヤガヤやりながら書いているところというふう
に言われています。こうした独立の気風を持った武装した自由の民がコサ
ックで、ドニエプル川下流のザポロージェ（ザポリージャ）などにシーチ
（砦）と呼ばれる拠点を持っていました。コサックの長はメンバーの男性
が選ぶという、民主的な組織だったと言われています。

図：イリヤ・レーピン「スルタンに手紙を書くザポロージェのコサック」

(Wikipedia: “Reply of the Zaporozhian Cossacks”

https://en.wikipedia.org/wiki/Reply_of_the_Zaporozhian_Cossacks

最終確認日 2023年7月10日)



ザポロージェ・コサックは、オスマン帝国やクリム・タタールの領内に
しばしば略奪遠征に出かけ、対オスマン帝国戦、対タタール戦などで活躍
する有能な戦士として知られていました。そのため、16世紀後半からポー
ランド＝リトアニア共和国（ポーランドとリトアニアは1569年に連合国
になるので、ここから先はこう呼びます）に傭兵のような組織として取り
込まれます。これは登録コサックという制度です。ポーランド＝リトアニ
ア共和国に登録されたコサックには、軍の指揮命令系統に従い、軍役を果
たすことと引き換えに、国から俸給として毎年一定額が支払われ、免税特
権も与えられました。コサックにとっては有利な待遇ですが、登録コサッ

クの数に限られていたため、登録コサックになれないコサックとの間で内部の階層差が拡大していき、それが後々、特権的な登録コサックとそうでないコサックのあつれきに繋がっていきます。

コサックは、19世紀の半ば以降、ウクライナのナショナリズムの中で英雄化・シンボル化します。先ほどの絵も19世紀のものですが、ロシア語で書いたもののウクライナに取材した作品の多いニコライ・ゴーゴリ（例えば『タラス・ブーリバ』）や、初期のウクライナ語詩人のタラス・シェフチェンコ、あるいはウクライナ史の基礎を築いたとされるミハイロ・フルシェフスキーなどが、その例として挙げられます。その中で、コサックは、民主的な組織で、ポーランドやロシアなどの有力国家から独立を保とうとした自由の戦士だったというかたちでしばしば語られます。しかし、実際には、内部に階層差があり、有力者による寡頭制に変化していきます。また、自由の民だけでも外国と戦うだけではなくて内部の対立もありました。ロシアやポーランドと戦って独立を果たしそうにもなりますが、当時の合従連衡を繰り返す国際関係の中で、そのいずれかと結んで内部で抗争したり、他国への従属を招いたり、戦争によってこの地域の荒廃を引き起こしたりもしています。シェフチェンコには、コサックの栄光だけでなく、従属や荒廃をもたらした側面を否定的に描いている詩があります。

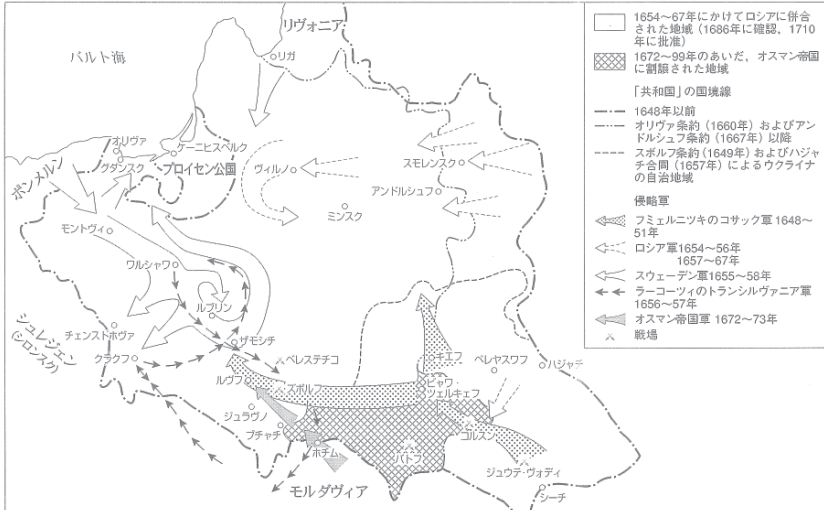
(2)コサックの対ロシア関係と対ポーランド関係

(ボフダン・フメリニツキーの蜂起)

コサックは実際どんな関係をロシアやポーランドと持っていたのでしょうか。最も有名な事件が、1648年から57年にかけてのボフダン・フメリニツキーの蜂起です。登録コサックの長をヘトマンと呼びますが、そのヘトマンだったボフダン・フメリニツキーが、ポーランド＝リトアニアの登録コサックという立場にもかかわらず、カトリック教会や貴族、貴族が抱えるユダヤ教徒に対して大反乱を起こし、カトリックの貴族やユダヤ教徒を虐殺、追放しました。そこに、貴族による農奴支配にあえぐウクライナの農民の反乱も加わります。

地図5：17世紀半ばのポーランド＝リトアニアの戦乱

(伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『新版世界各国史 ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998年より)



これが17世紀半ばのポーランド＝リトアニア共和国の地図です。東南部が、だいたいコサックの支配域や反乱が広がった地域です。ここにはもともと正教徒のスラヴ人が主に住んでいました。正教徒の貴族は、ポーランドやリトアニアの支配の中でだんだんカトリックやポーランド文化の影響を受けるようになります。また人口希薄で肥沃な平原地帯だったこの地域にポーランド中央部から大貴族が進出して所領を拡大し、ユダヤ教徒がその所領経営の実務に当たりました。その中で農奴支配が強化されていきます。一方、地元の農民（農奴）の信仰や言語への影響は限られていました。そのため、支配層と非支配層で、言葉や文化、宗教・宗派などのエスニシティの面で違いが出てきます。コサックは正教徒が多いので、同じ正教徒の農民とともにカトリックの貴族やユダヤ教徒に対する反乱を起こすという構図になります。じつは、その反乱の少し前に、ポーランド＝リトアニア内の正教会をカトリックの教会に合同させる、教会合同が起きます。1596年のブレストの教会合同です。これによって一旦、ポーランド＝リトアニアの中の正教会が非合法の教会になってしまいます。後に非

合法化は解除されるのですが、これに現れているように、ポーランド＝リトアニア内で正教会の信仰が抑圧され始めたのがこの頃なのです。それに対する正教徒の不満も一緒になって、ボフダン・フメリニツキーの反乱に至ります。これは、しばしば後世の政治状況から遡及的に解釈されることとなります。つまり、ウクライナのナショナリズムやソ連の階級史観のなかで、ウクライナの民衆によるポーランドの貴族への反発・蜂起だと語られて来ました。しかし、歴史研究の立場からは、当時としてはあくまで宗派対立、身分対立と見るべき問題です。ただ、従来、ポーランド人に対するウクライナの農民やコサックの反乱というかたちで語られることが多かったわけです。

(ヘトマン国家)

その反乱の中で2つ重要なことが起きます。ひとつは、ポーランド＝リトアニアの東南部の地域に、登録コサックの長ヘトマンの下でザポロージェ・コサックの軍政が敷かれる地域が出てきます。ヘトマンの下でのコサックの自治が、後々、ヘトマン国家と言われるザポロージェ・コサックの政治組織に発展していったと言われています。

(ペレヤスラフ条約)

もうひとつは、ポーランドに対するウクライナのコサックの反乱にロシアが関わってきたことです。有能な戦士だったコサックですが、当時の国際状況の中で、いくら辺境地とはいえ自分たちの力だけで独立するのはなかなか難しいので、同盟相手を探すこととなります。その中で同じ正教会の信仰を持っていたロシア・ツァーリ国家に同盟相手を求めることとなります。それが、1654年のペレヤスラフ条約（あるいは協定）で、いまのウクライナのペレヤスラフというところで結ばれたコサックとロシア・ツァーリ国家との条約です。コサックに対するロシアのツァーリの宗主権と、その下でのコサックの自治を定めています。これは19世紀の帝政ロシアの時代からソ連期を通して、伝統的に、ロシアに小ロシア、あるいはウクライナが帰属した、ポーランド貴族の支配に喘いでいたウクライナがポーランドに反乱を起こしてロシアに戻ってきたと解釈されてきました。帝政ロシアの場合は、コサックがツァーリに臣従したという点も強調されました。このペレヤスラフ条約は、2021年、おととしの6月にプーチンが出した論文にも触れられているロシア・ウクライナ間の重要な歴史的画期ということになっています。

(フメリニツキーの銅像とペレヤスラフ条約 300 周年記念)

その理解を象徴する 2 つの出来事を簡単にご紹介しますと、1888 年、帝政ロシア時代のキエフにフメリニツキーの銅像が完成します。これはウクライナ人としてのフメリニツキーではなくて、あくまで小ロシアを含むロシアの一体性を象徴する記念碑です。ポーランドに反乱を起こして、ロシアにウクライナを戻した人物としてフメリニツキーの銅像がキエフに建てられたわけです。この場合も、ロシア中央部だけでなく、地元ウクライナの知識人たちが関わって記念碑建設が行われています。

もうひとつは、1954 年、フルシチョフ時代のソ連でペレヤスラフ条約 300 周年記念が祝われます。この時は、さすがにツァーリに臣従するというような封建的・身分的な言説は避けられるのですが、代わりにロシア人とウクライナ人の再統合としてペレヤスラフ条約の記念が行われました。その際にロシア側からの「プレゼント」として、ソヴィエト・ウクライナにクリミアが移管されることとなります。

このように、ロシアとウクライナの一体性を重視したい人から見ると、ペレヤスラフ条約は重要な意味を持つものなのですが、実際どうだったのでしょうか。じつは、当時のコサックはより良い自立の条件を求めて、ポーランド＝リトアニア、オスマン帝国とクリム・ハン国、ロシアという 3 者の間で、絶えず同盟相手と敵対相手を入れ替えながら戦っていたのです。ペレヤスラフ協定も一時的な同盟協定であって、フメリニツキーも晩年これを覆して、ロシアに反旗をひるがえします。さらに、その後を継いだコサックのヘトマンたちも常にロシアと一体化しようとしていたわけでもありません。

(ハジャチ合意とアンドルソヴォ休戦条約)

フメリニツキーの次のヘトマン、イヴァン・ヴィホフスキーのときに、ポーランド＝リトアニアともう一回妥協して、ポーランドとリトアニアとルーシの三国民の連邦国家にしようとする計画が両者のあいだで持ち上がり、最終的に、1658 年、ハジャチ合意として、上層コサックへの貴族位の付与を含むコサックへの諸特権の付与、コサックを中心とするルーシ国家の自治、正教会の復権が盛り込まれた合意が作られました。これは実現の一手手前まで行くものの、ロシアの介入や、親ロシア派のコサックや非エリート・コサックの反対から、最終的に実現しませんでした。では、ウクライナのコサックたちの領域や、ポーランドとロシアの間の国境

線はどうなったかと言いますと、先程のアンドルソヴォの休戦条約で定められます。これはポーランド・ロシア間の戦争の講和として、両国の間で、コサックの参加なしに、コサックの実質的な支配域を含む地域の境界線を定めたものです。先程の地図 5 をご覧ください。ウクライナ方面について言いますと、ドニエプル川から東（左岸）がロシア領で、キエフもそこに加えられました。ロシア領に入った地域では、さっき述べたヘトマン国家が自治を認められて維持されますが、のちに自治は縮小されていきました。キエフを除く、ドニエプル川の西（右岸）がポーランド＝リトアニア領になります。じつは、この国境線は 18 世紀後半のポーランド分割の時まで続くものなのですが、コサックはこの決定に関わっていません。ポーランドの歴史学ではこちらを重視するのですが、ロシアやウクライナの歴史学の中では、さっきのペレヤスラフ条約の方に注目が集まり、大きく取り上げられることが多かったということです。

その後、1700-1721 年の大北方戦争の時にもロシア領内のコサックが反旗をひるがえして、スウェーデンと組んでロシアに対抗します。結果的にロシアが勝利し、コサックの自治はさらに大幅に縮小します。その際、ロシアに歯向かったコサックのヘトマン、イヴァン・マゼッパとピリプ（フィリップ）・オルリクはロシアから見れば国賊、裏切り者で、一方、ヘトマンの反乱をロシアに告げたマゼッパの腹心のコチュベイは忠臣という評価が帝政期やソ連期にありました。ですが、ソ連末期以降のウクライナのナショナリズムでは、その評価が逆転します。

話をコサックの自治に戻しますと、その後 18 世紀後半のエカチェリーナ 2 世の時代にヘトマンの制度は終焉を迎えます。また露土戦争に勝利したロシアは黒海北岸のほぼ全域を領有するようになり、ドニエプル下流に残っていたコサックの自治も最終的に解体します。そして、コサック社会の民衆層は農奴に、有力コサックはロシア貴族や将校に、そしてその地域の正教聖職者はロシア正教会の聖職者や官吏になって、ロシア帝国に吸収されていきます。

（コサックとポーランド貴族の差異）

次に、コサックとポーランド貴族の差異についてお話しします。さっきからコサックはポーランドに反乱を起こしているという話ばかりしていますし、宗教も違うので、コサックとポーランドの貴族は異質な存在なのかと思われるかもしれませんが、そうでもないという話を少しだけご紹介

しておきます。16世紀のコサックのヘトマンで、ドミトロ・ヴィシネヴェツキーという人がいます。彼は、正教徒のルーシの貴族の出身でコサックになった人物です。でも、同じ一族でポーランド側に立ってコサックと戦った人もいます。それが、ミハウ・イエレミ・ヴィシニョヴェツキです。ヴィシネヴェツキーもヴィシニョヴェツキも同じ姓ですが、ウクライナ語読みするか、ポーランド語読みするかの違いです。ミハウ・イエレミの方は、生まれたときは正教徒だったのですが、カトリックに改宗して、コサックではなくてポーランド国家を選びました。フメリニツキーの反乱のときにコサックの軍隊と戦って、活躍した指揮官です。彼の息子のミハウは、当時のポーランド＝リトアニアでは貴族が国王を選挙で選ぶ選挙王政だったので、父親であるミハウ・イエレミの軍人としての功績もあって、ポーランド王に選出されています。コサックと王を含むポーランドの貴族とは、じつは血縁関係だったということです。ウクライナ地域のルーシの貴族は、貴族同士の折り合いが悪くなってコサックに身を投じる場合もあるけれども、ポーランド国家のエリートになる場合もあるのです。改宗もあり得たので、宗派の違いも絶対的なものではありませんでした。

また、ポーランド＝リトアニアのようなカトリックの国のエリートは、正教徒であってもラテン語やカトリック的な文化・素養を身につけていることがしばしばでした。先ほども述べましたように、上層コサックは正教徒だけれどもラテン的教養がありましたので、コサックの自治がなくなった18世紀以降も、ロシア帝国の貴族として、軍人や官僚として、それなりに栄達の道を進むことができたと言われています。

次にウクライナのナショナリズムが育つ19世紀の話題を割愛して、20世紀の、ロシア革命以降の話に移りたいと思います。もし19世紀のロシア・ウクライナ・ポーランドのナショナリズムにご関心のある方は、あとでご質問いただければと思います。



3. ロシア革命・ソヴィエト政権とウクライナの独立運動

(1) ロシア革命と第一次世界大戦の終結

第一次世界大戦とロシア革命とウクライナの独立の問題に移ります。以下に、第一次世界大戦勃発前の1914年と、両大戦間期、第二次大戦中、第二次大戦後のヨーロッパ東部の地図を付けています。適宜ご覧ください。19世紀、ウクライナは、ロシア帝国領のウクライナと、オーストリア帝国領のウクライナに分かれていました。もちろん両方とも行政単位ではありません。現在のウクライナの大半の地域が、その両国に分かれていたということです。第一次大戦とロシア革命が起こる前までに、オーストリア領でもロシア領でもウクライナ人は少なくとも自治を要求する勢力になっていました。国際的にも大戦末期にロシア革命が起こって、ボリシェヴィキ政権が民族自決という方針を掲げます。アメリカ大統領のウィルソンも民族自決を提唱し始めます。そういう潮流の中で、ウクライナの運動家も自治や独立を掲げます。ただ、第一次大戦の東部戦線が、ウクライナ語を話す人々が住んでいた地域を東西に分断するかたちで南北に貫いていたので、東西ウクライナの連携は困難でした。前線の東西で、ウクライナ人勢力を取り巻く国際的な同盟・敵対関係が異なっていたことも連携を難しくします。

前線の東側では、1917年のロシア革命後、ウクライナ中央ラーダという、多様な立場の民族独立派の人々を包括する組織ができて、自治を宣言します。臨時政府の下で初めて「ウクライナ」という行政単位が登場しました。その後の十月革命で成立したボリシェヴィキ政権を認めなかった中央ラーダは、自治から独立に踏み切り、同年11月にウクライナ人民共和国の設立を宣言します。反革命の白衛軍、ボリシェヴィキ、ウクライナ独立派、その他の勢力が入り乱れる内戦になりますが、結局ウクライナ民族派・独立派はボリシェヴィキに敗れて、ドニエプル川流域の一体はソヴィエト・ウクライナになります。人民共和国の人々は、第一次大戦後に独立したポーランドと組んでボリシェヴィキと戦うものの、ウクライナの独立は達成できませんでした。一方、前線の西側のオーストリア領の地域（ハリチナ）では、1918年11月に西ウクライナ人民共和国が独立を宣言します。こちらはポーランドとの戦争に敗れて、ポーランド領に組み込まれてしまい、東西どちらのウクライナも独立できませんでした。ドニエプル

川流域とハーリチナの統合は双方から掲げられていたものの、当然のことながら、その実現には至りませんでした。

地図6：東ヨーロッパ1914年

(以下、地図9まで、ティモシー・スナイダー、松井貴子訳『秘密の戦争—共産主義と東欧の20世紀—』慶應義塾大学出版会、2021年より)



地図 7 : 戦間期の東ヨーロッパ



地図 8：第二次世界大戦下の東ヨーロッパ



地図9：戦後の東ヨーロッパ（1949-1989年）



ただ、ここで重要なのは、ウクライナという行政単位がロシア革命後に初めて登場するという事です。ロシア革命勃発後に中央ラーダや、その自治要求を認めたケレンスキーたちの臨時政府によってウクライナという自治組織が初めて認められて、なおかつ、その後、中央ラーダ側も、臨時政府を倒したボリシェヴィキ側も、ウクライナという行政単位、国を作り出しました。ここからウクライナ語での学校教育やウクライナの文化政策も登場します。こうした経緯から、時々、ウクライナはレーニンが作った人工的な国家なのだとされます。ときには、人工的な国だからその独立には根拠がないというように、ウクライナの独立や主権を脅かす文脈で

これが語られることもあります。もちろん、これはウクライナの独立を否定する理由には全くならないと思いますが、ソヴィエト時代にウクライナという枠組が固まっていったということは、確かに指摘できます。ただ、その中身がどうだったかという点、順風満帆とはいかないのがウクライナの現代史です。

時間の関係で、革命後の内戦期のドニエプル川流域のウクライナについてはここまでにして、次にソヴィエト・ウクライナの話に移ります。

(2) ソヴィエト・ウクライナ

(コレニザーツィア＝ウクライナ化政策)

ポリシェヴィキは、ツァーリ政府とは違って、ウクライナ人が存在することを認めます。ウクライナ人はロシア人の地方変種で、ウクライナ語はロシア語の方言で独立言語としては存在しないというのが帝政期の公式見解でしたが、ポリシェヴィキたちはそうではありません。ウクライナ人は存在する、ウクライナ語は独自の言語として存在するという立場を取ります。また一般にソ連内の諸民族の言語や文化の発展も保障しないとはいけないと説きます。したがって、ソヴィエト・ウクライナの人々に対して、ウクライナ語の使用やその文化的発展を保障しつつ、なおかつ、社会主義ソヴィエトの人民として社会主義化していくと公式には言うわけです。そこでソヴィエト初期に取られた政策が、コレニザーツィアです。ロシア語でコレニは根っこという意味です。根っこに根ざした政策ということで、日本語では土着化政策や現地化政策と訳されます。これはウクライナだけではなく、ベラルーシや中央アジアなどでも行われた政策です。ウクライナに関して言うとウクライナ化政策になりますし、ベラルーシになるとベラルーシ化政策となります。

このコレニザーツィアは、ソヴィエト・ウクライナでは 1920 年代から始められます。ウクライナ語による学校教育や出版活動の奨励・実施、ウクライナ科学アカデミーの設置とそれによるウクライナ文学やウクライナ史の振興が行われます。また、ロシア革命後のウクライナの内戦期に、ロシア中央からきたポリシェヴィキによってウクライナのソヴィエト化が進展するため、現地ウクライナの共産主義者ではなく、ロシア出身者がソヴィエト・ウクライナの要職を占めるようになっていました。そのため、コレニザーツィアでは、ソヴィエト・ウクライナをウクライナ人化する、

つまり、ウクライナ共産党やソヴィエト・ウクライナの政府機関にウクライナ人を登用することにしました。さらには、ウクライナ正教会のロシア正教会からの独立まで認めました。ただ、これは 1920 年代末から徐々に民族主義的な偏向だ、単に民族的というだけではなくて民族主義的だとして批判され始め、抑圧・粛清の対象になります。

ただし、確かにコレニザーツィアは 30 年代の初頭で終わるのですが、ソ連時代を通してその後もウクライナ語が禁止されたわけではありません。ウクライナ語は出版メディアでもずっと使われていましたし、ウクライナ語の学校教育も実施されていました。一方で、労働者を中心とするロシア本土からのロシア語話者の流入と、ウクライナ語話者のロシア語化が帝政期に比べてずっと早いスピードで進んでいきました。また、学校教育を通じたロシア語教育も途中から強化されていくことになります。

（大飢饉「ホロドモール（飢餓殺人）」）

もうひとつ、20 世紀前半のソヴィエト・ウクライナの話題として重要なのが大飢饉です。ソ連を襲った大飢饉は 3 回ほどありますが、そのうち一番規模が大きく、一番論争が絶えないのが 1932 年から 33 年の大飢饉です。ウクライナでは、これをホロドモールと呼びます。ホロドというのが飢え・飢餓、モールが死を意味するので、飢餓殺人というふうに訳していますが、別の訳し方をされている方もいます。ホロドモールと後々呼ばれるようになる大飢饉は 32 年から 33 年にかけて、ウクライナだけではなく、ロシア南部や、中央アジアの一部、北カフカスなど、ソ連のほかの黒土地帯を中心とする穀倉地帯でも起きます。ただし、ウクライナで一番被害が大きくて、300 万から 600 万人ぐらいの犠牲者が出たと現在では言われています。参考までにソヴィエト・ウクライナの人口は、第二次大戦開戦前の 1939 年時点で 3000 万人強なので、相当な割合で亡くなっていると言えると思います。

これはなぜ起きたのか、どういうものだったのでしょうか。当時スターリン率いるソ連指導部は農業集団化を強制的に始めます。その集団化に抵抗する農民たちが、コルホーズに持っていかれるぐらいならと言って、次シーズン用の種もみや農作業に必要な家畜を処分して自分たちで食べてしまうというような消極的な抵抗活動を行う。その中で農村が持っている不作のときに対する余力がなくなってしまう。その 31 年に、例年と比べると穀物の実りが悪い不作がやって来て、農民たちは予定された穀物供出

量の供出を拒み、ソ連中央が予定していた穀物調達量が目標に届かない。では、どうするか。ウクライナへの穀物調達量の割り当てをより増やした上で、翌 32 年から強制的な調達を開始することになります。これが飢饉へと繋がっていく、とされます。

飢饉時の食料状況に関して言いますと、都市部には農村から集められた食料があるので農村から都市部に逃げたいのですが、農民は自由に都市部に行けないように移動制限がかかっている、強制的に農村に送還されました。あるいは、ソヴィエトでの飢饉に対して国際的に援助の申し出があったのをソ連指導部は断って、なおかつ、飢饉が起きている地域に穀物を回さずに、穀物を輸出に回す、いわゆる飢餓輸出を行いました。こうして、非常に皮肉ですけれども、ソ連の穀倉地帯で多くの餓死者が出ます。

ソヴィエト・ウクライナに対するまとまった締め付けがこの時期に行われます。大飢饉とともに、農業集団化に抵抗する農民を、「富農（クラーク）」と定義して撲滅する運動や「反革命分子」の一扫もこの時期に同時に進められて、処罰者は強制移住や強制収容所への移送の対象になり、甚大な犠牲者を出します。農業集団化も一層進めて、党員や協力者による穀物を中心とする強制的な食糧徴発も行います。また、こうした飢饉や混乱を起こし、それを放置した責任を問われた現地のウクライナ共産党員の処罰も行われます。また、ちょうど最末期に当たるコレニザーツィアの批判と弾圧、その関係者や担当者の処罰もこの時期に並行して行われます。処罰してポストから外した者の代わりに、連邦中央の共産党員をウクライナ共産党に送り込み、党幹部を交替して、党の非ウクライナ化が進みます。

（現代の議論）

この大飢饉に関しては、現代でも大きな論争があります。もちろんソヴィエト時代はタブーで、経験した人は知っているけれども、何があったかを公にしたり、議論したりはできませんでした。現代の研究者によると、当時スターリンらは、集団化に抵抗する反革命分子が食料を隠していて飢饉になったのだとか、あるいはポーランドによるウクライナ民族主義を煽る陰謀の結果、混乱が起きて飢饉になったのだと言っていたそうです。

80 年代以降、ペレストロイカが進む中で、ホロドモールに関する議論がウクライナの人々の間で行われるようになります。確かに天候不順はあったものの、人為的要因の大きい大飢饉であり、ソ連指導部の責任が問われるようになります。この過程で 1988 年に初めて大飢饉にホロドモールと

いう名が付けられました。ウクライナでは、この大飢饉をホロドモールと呼び、ジェノサイドだと主張していきます。最初にジェノサイドだと公式に定義したのは 2003 年のウクライナ最高会議の決議でした。また、オレンジ革命に勝利して大統領になったヴィクトル・ユシチェンコ（在任期間 2005-10 年）は、アイデンティティ・ポリティクスや歴史政策にのめり込みました。彼は 2006 年に法令を出して、ホロドモールをジェノサイドだと認定し、ホロドモールの記念博物館をキエフの中心部に作りました。さらに、ユシチェンコの任期最末期の 2010 年 1 月にキエフの控訴裁判所から、ホロドモールはスターリンらのソ連指導部によるウクライナ人へのジェノサイドだとして、スターリンら指導部を有罪とする判決が出て、確定しました。もちろん、有罪とされたメンバーは死亡しているので刑は執行されず、象徴的なものですが、このような判決が出ています。

他方、ロシアは、大飢饉はソ連指導部に責任がある、人道に対する犯罪だということは認めますが、ジェノサイドではないという立場を 2008 年以降公式に出しています。またウクライナでも、ユシチェンコの次の大統領で、ロシアと結びつきの強い東部に基盤を置いていたヴィクトル・ヤヌコーヴィチは、これはウクライナ人へのジェノサイドではなく、ソ連諸民族の悲劇だったという立場を取ります。このことによって、ウクライナで、ホロドモールがジェノサイドではないと法的に覆されたわけではないのですが、ヤヌコーヴィチは個人としてそういう発言をしたわけです。

大飢饉は実際にはどうだったのでしょうか。私は専門家ではありませんが、様々な文献を読むに、ジェノサイドだと言うのも難しいけれども、ジェノサイドでないと完全に否定することもまた難しい問題だと思っています。この大飢饉、いわゆるホロドモールは、人為的要因の大きな飢餓ですし、救済を行わないなど、ソ連指導部の対応にも問題がありました。しかし、飢饉の範囲、すなわち地理的範囲や対象となる民族、ならびにどこまでソ連指導部が意図したのかなどに関しては議論があります。ウクライナだけの飢饉か、あるいはウクライナだけを狙った飢饉だったかということ、それは違います。ソ連内のほかの地域でも飢饉は起き、ウクライナ人以外も被害にあっています。ただ、ウクライナで被害が大きいのです。当時、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国の中にあつたクバン地域でも大飢饉が起りますが、クバンもじつは相当数ウクライナ系の人が入っていたところ。このウクライナとクバンで農民の流出制限のような規制

が厳格だったり、ウクライナ共和国への穀物持ち込みに制限があったりして、飢饉の状況が相当厳しかったということがいろいろな文献で指摘されています。また、ウクライナではロシア本土とは異なり、歴史的に家族単位での個人営農が一般的であり、土地も個人で保有・所有されていたため、農業集団化への抵抗が強かった地域でもあり、その抵抗を抑えるため、結果的に強硬な農業集団化につながります。ジェノサイドという用語を提唱したラファエル（ラファウ）・レムキンという、両大戦間期のポーランド出身で、その後アメリカにわたって活動したユダヤ系の弁護士がいます。レムキンは、ポーランドにいた当時、隣国の大飢饉について聞いていたようで、のちにこれはウクライナ人へのジェノサイドだと言っています。

では、何が問題なのでしょう。問題は、ウクライナの歴史政策・記憶政策が評価の難しい大飢饉をジェノサイドとして持ち出したこと自体にあるのかもしれませんが。1932年から33年の大飢饉をホロドモールと呼び、ソ連によるウクライナのジェノサイドと見なして、東部や南部を含むウクライナ全土で適応可能な被害の記憶でウクライナ人の団結を促そうとした一方で、ソ連の継承国とされるロシアとの違いを先鋭化し、全ソ連的な人災と見なすロシアとの対立が深まったということでしょう。

4 第二次世界大戦／独ソ戦——大祖国戦争かウクライナ独立運動か——

(1) 両大戦間期ポーランドにおけるウクライナの民族主義

第二次世界大戦、ソ連やその後のロシアにとっては特に独ソ戦として認識される戦争は、ウクライナにとってどのように戦われ、どのように記憶されているのでしょうか。両大戦間期のウクライナは、ソヴィエト・ウクライナとポーランド領のウクライナに分かれていました。先程の地図8をご覧ください。こちらがソヴィエト・ウクライナで、他方、ルヴネ、ウツク、コヴェルなどがあるヴォウイン地方や、リヴィウ（ルヴフ）などがあるガリツィア地方、つまりいまのウクライナ西部（ハーリチナ）が当時はポーランド領でした。ポーランド領だったウクライナとソヴィエト・ウクライナで第二次大戦の経験が全然違うということをこれからお話しします。

両大戦間期のポーランドにおいて、ウクライナ人（あるいは当時はルーシ人、ルシン人とも呼ばれていました）は、総人口の約15%を占める最大のエスニック・マイノリティでした。ウクライナ系の人々は、ポーランド

系の地主や入植者が影響力を及ぼす東部の後進的な農業地域に、主に農民として暮らしていました。ポーランドには、第一次世界大戦後の独立の条件として、連合側から国内少数民族の保護が課されており、憲法上も少数民族文化の発展が保障されていましたが、実態はそれにそぐわないものでした。教育や文化の面で同化政策が取られ、農地改革でも不利な扱いを受けました。

ポーランド領になった西ウクライナ地域は、ヴォィン県以外、第一次大戦前はオーストリア領で、ガリツィアと呼ばれていたところです。ここでは 19 世紀後半に、ポーランドのナショナリズムだけでなく、ウクライナのナショナリズムも成長します。第一次大戦後に西ウクライナ人民共和国の独立が宣言されたものの、戦争の結果、ポーランドに併合されたことは先ほどお話ししたとおりです。このように民族意識が芽生えたウクライナの人々、特に民族主義活動家にとって、両大戦間期のポーランドの政策は不満が募るものでした。過激なウクライナ人民族主義組織が組織されて、ポーランド政府要人に対するテロや、ポーランド人と仲良くやっ払いこうという妥協派のウクライナ人に対するテロ、破壊工作や現金強奪などを行います。有名なのは、UVO（ウクライナ軍事組織）や OUN（ウクライナ民族主義者組織）などで、とくに OUN は戦後まで続く組織になります。こうした組織によってウクライナ民族主義が過激化すると、ポーランド当局もウクライナ人を十把一絡げに取り締まったり、ウクライナ地域の暴力的な掃討作戦を行ったり、ポーランド社会の中でも同化政策が支持されるようになっていきます。両者の対立が激化した結果、ポーランドもウクライナも中道の人たちがどんどん影響力を失い、過激派が力を持つ、悪循環に陥っていきます。このような状態にあった 1939 年 9 月、ドイツの侵攻によって第二次世界大戦が勃発するのです。

(2) 西ウクライナにおける第二次世界大戦

その後、ほどなく、ポーランド東部には独ソ不可侵条約秘密議定書に基づいてソ連軍が進駐します。11 月には西ウクライナと西ベラルーシが、それぞれのソヴィエト共和国に併合され、ソ連領になります。ポーランドにとってみると、第二次大戦の勃発時、ドイツが攻めてきただけではなく、ソ連の侵攻も受けたわけです。ウクライナ民族主義者にとってもソ連への併合は望まない結果でした。

1941年6月に今度は独ソ戦が始まると、ドイツ軍はどんどん東方へ戦線を拡大して西ウクライナを占領し、さらには開戦前からのソヴィエト・ウクライナも占領下に置きます。独ソ戦の主戦場の一つとなり、ナチがユダヤ人だけでなくスラヴ人に対しても人種主義的な支配を行ったウクライナでは大きな犠牲が出ます。この間、ウクライナでは、約200万人がソ連軍（赤軍）兵士として参戦したほか、ドイツに対するパルチザン戦を戦った一方で、ユダヤ人に対するホロコーストへの加担やドイツ支配機構への協力など、一定の対独協力も生じ、ウクライナ人の態度は様々に異なりました。

とはいえ、開戦前からのソヴィエト・ウクライナ（現在のウクライナの中部、東部、南部）の人々にとってみるとドイツは侵略者です。ソ連では、独ソ戦を、ファシスト・ドイツ（ナチ）を駆逐して、祖国を守った偉大な戦争として「大祖國戦争」と呼んでいました。この経験や歴史観を、この地域のウクライナの人々は——反ソ感情やウクライナ・ナショナリズムがあるものの、基本的には——共有できるわけです。

しかし、元ポーランド領だった西ウクライナの人たちの体験はこれとは異なります。最初にソ連がやってきて占領・併合し、その後ドイツがやってくるので、ソ連からの「解放者」としてドイツと協力するウクライナ民族主義の人々や組織が出てきます。ドイツ支配下で、警察補助隊などとしてホロコーストに加担したウクライナ人や、ナチ武装親衛隊SSガリツィエンに入って、ソ連軍やそのパルチザン、あるいはポーランドのパルチザンと戦った人々もいます。また、先程のウクライナ民族主義者組織 OUN は、当初ドイツがウクライナに対して宥和的だったこともあってドイツに協力します。ただ、ドイツはウクライナの独立を結局否定するので、OUN 急進派の指導者ステパン・バンデラらはドイツから距離を置き、ドイツは彼らをザクセンハウゼンの強制収容所に収容し、両者は対立するようになります。これ以前の1940年に OUN は穏健派のメリ尼克派と急進派のバンデラ派に分裂しますが、1942年にバンデラ派の配下にウクライナ蜂起軍 UPA が作られます。ウクライナの独立を掲げた OUN と UPA はソ連に対してもドイツに対しても抵抗運動を行うことになりますが、それでも一時ドイツに協力していたわけです。

（ヴォウインの虐殺）

それからもう一点、この OUN と UPA の問題としてしばしば取り上げ

られるのが、「ヴォウインの虐殺」です。1943年の春から44年にかけて、もうドイツの負けが見通せてきたときに、OUNとUPAは、西ウクライナにソ連が戻ってくるまでにウクライナ人が多数を占めるウクライナ独立国家の基礎を作って対抗したいと考え、現地のポーランド系住民と、ホロコーストをどうにか逃れて匿われていたユダヤ人の虐殺を指示します。開戦前のポーランドのヴォウイン県とその近隣のガリツィア諸県に当たる地域でUPAやそれに協力した農民らによって虐殺が行われ、諸説ありますが、4～6万人の被害者が出たと言われています。虐殺に加担しなかった、あるいはポーランド人らを匿ったウクライナ系住民も虐殺の対象になったと言われています。戦後、ここにウクライナ国家を作るときに、邪魔になるポーランド系・ユダヤ系住民は物理的に駆逐するというかたちで、エスニック・クレンジング、民族浄化が行われたのです。それに対する報復として、ポーランド系住民がウクライナ系住民を襲う事件も起きました。実際にはポーランド系とウクライナ系の区別は難しい場合もありますが、当時のナチもソ連も、エスニシティあるいはナショナリティで現地住民を区別して生殺与奪を行う中で、現地住民もそれに巻き込まれ、自発的にそうしたエスニック・クレンジングに関わっていくという事態が生まれます。

住民の民族的均質化は、戦後の1944・46年にも、ソヴィエト・ウクライナとポーランドの間の「再定住」という名目の住民交換によっても行われました。ポーランドのウクライナ人約50万をソヴィエト・ウクライナに、他方ソヴィエト・ウクライナのポーランド人やユダヤ人約120万をポーランドへ、移住させたのです。これに抵抗してポーランド国内に留まり続けるウクライナ人に対して、1947年、ポーランド政府は、「ヴィスワ作戦」と称して、UPAの残党の掃討とともに、ポーランド西部・北部への暴力的で強制的な移住を行いました。

(3) ウクライナ東西での第二次世界大戦経験の違い

こうした歴史的暗部を持っているOUNやUPAですが、戦後、対ソ抵抗運動を続けます。独ソ戦の勝利後、ソ連は第二次大戦で初めて領有した西ウクライナで農業集団化やUPAの残党やその他の反ソ・パルチザンの掃討を行いますが、UPAはこれに抗し、1950年代まで抵抗活動を続けました。こういう経緯が西ウクライナではある程度知られていましたが、ソ

連時代は OUN や UPA は否定的に捉えられます。先述のように、ソ連では独ソ戦を「大祖国戦争」、「ファシズムへの勝利」として記憶したので、ウクライナ東西の第二次大戦の経験の違いは不問に付されました。また、ソ連に敵対し、ドイツに協力した、ウクライナ民族主義者はタブーであり、封印されてきたので、ウクライナ西部以外ではよく知られていませんでした。

しかし、ウクライナ独立後、とくに先程も名前を出した、アイデンティティ・ポリティクスに乗り出したユシチェンコ大統領の時に、UPA をウクライナ民族の英雄として顕彰する動きが強まっています。ユシチェンコ自身は西ウクライナの出身ではありませんが、この西ウクライナの民族主義のシンボルとなっていた OUN や UPA をウクライナの民族的な軍隊である、そして連合国と協力して戦った正規戦闘員であると位置づけ、なおかつ、2010 年の大統領任期の末期に大統領令によって、OUN の指導者だったステパン・バンデラに「ウクライナの英雄」という公的称号を送ったのです。

写真 1 : ステパン・バンデラ (1909—1959 年)

(写真 1・2 はともに以下より。最終確認日 2023 年 7 月 10 日)

Wikipedia : “Stepan Bandera”

https://en.wikipedia.org/wiki/Stepan_Bandera)



写真2：ユーロマイダンにおけるバンデラの表象



こうした、バンデラその他のウクライナ民族主義者、OUN・UPA の復権・顕彰は、大祖国戦争を戦ったという記憶に馴染まない西ウクライナの人たちの中で、ソ連時代末期からまずは地域レベルで行われるようになってきました。それをユシチェンコ以降、中央の政府も行ったということになります。また、例えば、写真2は2013年から14年にかけてキエフの中心部で行われたユーロマイダン（マイダン革命）の時の写真です。一見してわかるようにバンデラの写真が掲げられています。背景をみると、どうもキエフ市議会庁舎にバンデラの写真を掲げているようです。この写真はウィキペディアから借りてきたものですが、当時の報道で、ウクライナ蜂起軍のシンボルカラーの赤と黒を背景にステパン・バンデラと書いた垂れ幕のようなものを掲げているグループを私も何回か見ました。マイダン革命の時、親EU・反ロシアのマイダン派の中でもウクライナ民族主義的な勢力によって至るところでバンデラの顕彰が行われていたようです。

ですが、当然のことながら、バンデラや OUN・UPA の顕彰が、全ウクライナ規模で同意が得られるか、あるいは国際的に支持されるかということ、そうではありません。この点はホロドモールが全ウクライナのな記憶になるのとは異なります。ソ連側で第二次大戦を戦った東部の人々にとってみると、自分たちに反抗し、ソ連人民を殺害した反ソ・パルチザンなので、容認できるわけではありません。マイダン革命時も、東部に支持基盤を置くヤヌコーヴィチやその支持者は反発しましたし、彼を支持するロシアからもマイダン派や臨時政府がファシストだという批判が出てきました。また、バンデラ自身は収容所に入っていました、その手下たちはホロコーストに加担したり、ポーランド人を虐殺したりしているので、そういう人々を顕彰するには国際的にも批判が起こります。サイモン・ヴィーゼンタール・センターなど、ユダヤ団体からも抗議や批判が広がっていますし、ヴォウインで虐殺された側のポーランドを含めてウクライナの親 EU 路線を支援する国々でも、批判が広がっています。2013・14 年以降現在まで、ロシアがウクライナに介入するときに絶えず出てくる、ウクライナ政府はファシストだ、民族主義者だ、ネオナチだという言説にも繋がっていくわけです。

おわりに

2014 年以降のロシアによるウクライナへの軍事介入、そして昨年 2022 年 2 月からの大規模侵攻（戦争）で、ウクライナは大きな被害を出し続けています。報道でもしばしば指摘されるように、ロシアはその侵攻の口実に歴史を都合よく利用しています。しかしながら、ロシアだけではなく、ウクライナや、今回はあまりお話する機会がありませんでしたがポーランドなど、それぞれの国が、政策の正当化、政治的支持基盤の獲得、国内の統合など、それぞれの都合で歴史を利用し、問題を引き起こしています。国内の対立につながる場合もあれば、国際問題化する場合があります。

ポーランドとウクライナは、さきほど述べたヴォウインなどでの UPA や OUN によるポーランド人の虐殺と、それに対するポーランド側の報復という過去、そして第二次大戦後にソ連によってひかれた国境線と住民交換という問題を抱えています、社会主義体制・ソ連の崩壊後も衝突はなく、歴史問題についてもそれなりに研究や対話の道が開かれています。ウクライナを支援し続けるいまでも、ポーランドにとって、ヴォウインの虐殺

はのどに刺さったとげですが、それでも和解や対話が成り立つのは、ポーランドにとってウクライナがロシアに対する緩衝地帯になる見込みがあるからこそだとも言えます。ポーランドは、2022年2月のロシアの大規模侵攻後、ウクライナからの難民を一番多く受け入れています。ポーランド国家の公的な支援が縮小されても、自費で避難者を支援する市民がいます。自ら自分の生活も大変な中でウクライナの人々を支援されていて、頭が下がる思いです。一方で、少なくとも国家としてのポーランドのウクライナへの対応には、自分たちは先に民主化に成功した手本であって、その自分たちが未熟なウクライナ人を導いているというような、上からの目線が無いわけではありません。ロシアとの戦いで共闘するためにウクライナを自らの陣営に加える、そのために最大限の支援をするという、国の安全保障上の利害が大きく働いてもいます。ポーランドにおける労働者としてのウクライナ人イメージが、今般のロシアの軍事侵攻で変化するののかについても今後注目したいと思います。

最後に、じつはウクライナ以外の旧ソ連諸国でも、ロシアとのあいだで歴史認識問題や歴史政策問題、あるいは少数民族としてのロシア系住民の処遇で揉めた国があります。エストニアやラトヴィア、モルドヴァなどです。それでも、今回ほどの大規模な軍事侵攻に結びついたところはありません。ソ連からの独立時にエストニアやラトヴィアがソ連時代の移住者であるロシア語系住民には自動的に国籍を認めなかった問題は、ロシアによる国際機関を通じた抗議や批判をとおして、両国とのあいだで解決が模索されました。

ウクライナファシストによるロシア系住民に対するジェノサイドという、2022年2月の侵攻の口実に用いられたウクライナ国内の状況——だからと言って、軍事侵攻を正当化できるものでは決してありません——には、これまで述べてきた歴史認識やアイデンティティ・ポリティクスのほかに、言語や宗教が考えられます。ウクライナでは、独立以降ウクライナ語を使用する傾向が強まり、1996年に成立した憲法ではウクライナ語が国家語に定められた一方、ロシア語の公用語化を目指す運動はあるものの、成功していません。2019年には言語法が制定され、ウクライナ語使用の強化と、少数言語のうちのロシア語の地位保障の減退が見られました。言語問題はウクライナ内部に対立をもたらしているほか、ロシア語を含む少数民族言語の位置づけをめぐるしばしばロシアを含む諸外国から批

判が出ています。また、ウクライナ政府の介入の結果、2018年にはウクライナ正教会がロシア正教会から分離、独立し、それをコンスタンティノープルの総主教も認めるという国際社会の変化もありました。とはいえ、従来のエストニアやラトヴィアの事例を考えると、ウクライナ政府がネオナチでロシア系住民へのジェノサイドを行っているのだというだけでは、ロシア政府にとって侵攻の口実にはなっても、実際の侵攻に踏み切るには不十分に思われます。侵攻にまつわる別の問題や利害を別途考える必要があると思っています。

(質疑応答)

Q いままでウクライナについては戦争が始まる前まではあまり興味はなく、「ひまわり」という映画の画面に出てくるぐらいしかあんまり興味なかったのですが、戦争が始まってからニュースを拾い読みしてまして、ウクライナが出てくればみんな見るようにしています。プーチンの残虐な行為は本当に人間としてとても許せないと思っています、絶対負けては駄目だと思っています。日本と違ってヨーロッパというのは歴史的にいろいろ入り組んでいて歴史的背景があると思うのですが、ドイツはなかなか戦車とかで消極的です。やはり何か過去の背景があるのでしょうか。やはり過去のことにに関して心配とか、ロシアを刺激することが怖いのでしょうか。それ以外に何かあるのでしょうか。消極的な原因というのは、首相がなんかあんまり積極的な人ではないみたいですけど。

Q 質問は三つです。一つ目「ロシアの強さの基盤は国の統一である。その統一を弱めるもの、諸民族の分離主義的發展、これはロシアにとって致命的であり、かつ許されない」と述べたのはプーチンかなとも思えますが、実際はアレクサンドル二世の遺言だそうです。ですからこれがプーチンの歴史観の本筋かなと思います、いかがでしょうか。

二つ目。「ガリツィアのウクライナ人が待っているものはこの異常な事態、すなわちロシア帝国による徹底的弾圧に強いられているこの状態を克服すること。ロシア帝国のくびきから解放されること。ウクライナ民族運動の統一。これがガリツィアのウクライナ人が待っているもの。」この発言は1890年代に出された発言だそうです。まだロシアのくびきからの解

放は待たれているのでしょうか。正直まだ 100 年以上経っても実現しないのは、歴史的に評価するとどうなるのでしょうか。

三つ目。ドラホマーノフという、1890 年ぐらいの指導者がいたみたいで、スラヴをまとめて連邦にして、その中で穏やかに各民族が良さを生かした、そういう政治体制を進めるのがいいだろう。その反対がマルクス主義の立場。強く言えばレーニンなんかですが、強い国家を作って、その中に民族もまとめていくという、なんか民族と国が理解できないようなまとめ方なのですが、ドラホマーノフが緩やかな民族のあり方を生かした、そういう組織がいいのではないかというふうに言ってるんですが、どんなものなのでしょうか。以上三つです。

A ご質問いただきましてありがとうございます。順番にお答えしていきたいと思います。ドイツの武器供与が慎重な理由ですが、ウクライナに戦車を供与するかどうかを議論したが結局見送ったという最近（2023 年 1 月段階）のニュースを念頭に置いて質問をいただいたのだと思います。一般論としてドイツが海外派兵や海外への武器供与に慎重なのは、第二次世界大戦のあの過去があるからです。NATO 加盟後もドイツ軍として国外で活動するというところに慎重な議論がずっとありました。特に今紛争地帯になっているところに武器を供与することがいいのか、なかなか議論が国内でまとまらないというのは、第二次大戦の侵略の過去があるからだと思います。

私もあまりドイツ国内の状況を把握できているわけではありませんし、それに EU 諸国の状況も日々変わっているので、どこまで当てはまるかわかりませんが、少なくとも 22 年の 2 月や 3 月の開戦当初は、直接的にロシアの軍事侵攻にあった過去を持つバルト三国やポーランドなどはウクライナの側に立つことを早々に鮮明に表明しましたが、ドイツなどは控えめな立場でした。ドイツの場合は、ロシアに対する親近感が比較的強いだけでなく、ロシアとの経済的な結びつきも強く、天然ガスのパイプラインもバルト海を通過してロシアからドイツに流れています。また、元首相のシュレーダーがロシアのガスプロムの取締役を務めており、2 月の大規模侵攻開始後もしばらくそのまま続けていました。ドイツの場合は、経済的なロシアへの依存度などをそれなりに天秤にかけていたのだと思います。

ただし、多くの EU 諸国がウクライナ支援を鮮明にしているいま、この

冬になってからの状況で、武器供与に対するドイツの慎重論がどういう理由から来てるかという点、さきほどの一般論以外には詳しくは把握しておりません。

次の質問に対してですが、3点質問していただきました。まず1点目、プーチンのような発言をしているのが19世紀のロシア皇帝アレクサンドル2世だったということですが、私ははっきりとその発言を承知していませんが、ロシアが多民族の広大な領土を抱える帝国になって以降、皇帝の中でもじつは色々な立場がありますが、民族主義あるいは社会主義を含めていろいろな分離主義に対して強い態度で臨まないといけないという立場の人はいました。一方で20世紀初頭までのロシア帝国がどの程度中央集権的に諸民族を統合して、締め付けていたかという点、いろんな流れがありました。分離主義者に断固として立ち向かわないといけないという立場や時期と、地域ごとに異なる事情があるので、地域の事情を汲んで現地任せましようという立場や考えが優先された時期もありました。また、地域によっても帝国の対応は異なりました。一概にはなかなか言えません。ただ、国家への統合の実態は帝政期と現在とで違いがあるものの、いかにもプーチン的な言説だと紹介していただいた見解が19世紀にあったというのはおっしゃる通りだと思います。

次に、ガリツィアのウクライナ人民族主義者が19世紀の終わりに、自分たちの民族的な領域であるところ、特にキエフがロシア帝国のくびきから解放されるべきだと述べたのに、なかなかそれが実現していないという話です。特に1890年代90年代はロシア帝国でウクライナ主義が厳しい規制にあっていた時期なのに対して、一方のオーストリアでは検閲がなく、民族言語の平等の方針の下、ガリツィアでウクライナの文化的発展が進んで色々言いたいことが言える状況にありました。ロシア帝国のくびきから自分たちの領域、すなわちウクライナ語話者が住む領域、特に母なる都市キエフを解放したいという主張が生まれてくるのかなと思います。

なぜ100年経っても解放されないのか。いろいろな理由があって、どうお答えしたらいいかわかりませんが、ナショナリズムの歴史から見ると、当時キエフにいた人がみんなウクライナの独立を望んでいたわけではないという点があります。19世紀末のキエフは確かにウクライナ民族主義者が拠点にしたところですが、一方でそこは、ロシア人やユダヤ教徒、ポーランド人が住む多民族都市でした。数の上ではロシア人がウクライナ人を

上回ります。キエフは、19世紀末に盛り上がるロシアの急進的民族主義の拠点の一つでもあり、ロシアのポピュリストたちが反ユダヤ主義的なポグロムに至る暴動を起こした地域でもあります。また社会主義の運動もありました。国境の外のガリツィアの、いわばキエフの実情をあまり知らないウクライナ人民族主義者が思うほど、19世紀末のキエフはウクライナ的でなかったと言えると思います。ウクライナの独立を望む人がいなかったわけではありませんが、決してそういう人たちだけではありませんでした。

三点目は、スラヴ系の諸民族の連邦を唱えたウクライナの思想家、ミハイロ・ドラホマーノフのことでしょうか。この点については不勉強ですので、調べて機会があったらお答えしたいと思います。

Q 8世紀から19世紀まで詳しい歴史を遡ってくださってありがとうございます。その後ウクライナが独立してからの三十年の流れの中で、戦争を避けられる手立てというのはなかったのでしょうか。また、武器供与というよりも、停戦の見通しや条件はいかがでしょうか。

A ご質問ありがとうございます。ウクライナ独立後、こうなる前に避けられることはなかったのかということですね。本当に起こってはいけない事態がいま起きてしまっています。

おそらくロシアとしては、ベラルーシとウクライナが離反することが一番避けたい事態です。ロシアから見ると、旧ソ連が崩壊してバルト三国は勝手に別れていってしまいましたが、ベラルーシ、ウクライナは少なくとも自分たちの側の緩衝地帯として、EUやNATOとの間に残ってほしかったのに、ウクライナがNATO加盟を目指す状況になってきた、この点が一番問題だったのだと思います。前回の本庄先生のお話にも出てきましたが、ワルシャワ条約機構は解散するが、NATOは解散しなかったのが冷戦の終わり方として良かったのかという点ともつながります。NATOは、解散しないだけでなく、従来のロシアの勢力圏にどんどん拡大し、ロシアにとっては危機的状況になりました。

また、国際社会でアメリカがやって許されることをロシアがやると許されないというダブルスタンダードも確かにあります。こうした点にロシア側は色々不満を溜めたのだと思います。だからといってそれが開戦の口実

として認められるわけではないのですが、確かにロシアが危惧するように、冷戦時代ほどパワーバランスを重んじた国際関係になっていないという点もあると思います。

どうすれば、停戦、戦争終結に向かうかというのは、私も一刻も早くそれを望みますが、それは私も教えていただきたいくらいです。(会場から「プーチンが死ぬしかない。」の声) ロシアの体制はプーチン一人であるようになっているのではないので、おそらくプーチンが亡くなったとしても戦争は継続され、ロシアの覇権主義の問題はそのまま残ると思います。残念ながらプーチンだけで終わるような問題ではないと思います。

Q プーチン政権の見方がバルト三国と対ウクライナでは違うように思われます。その原因はどこにあると思われませんか。

A ご質問ありがとうございます。ロシアは1990年代や2000年代に、ソ連時代に移住したロシア語系住民の国籍問題や歴史政策などで、バルト三国、とくにエストニア、ラトビアと対立を抱えました。それでもロシアは軍事侵攻に踏み切ることはなく、欧州評議会や欧州安全保障協力機構などの国際機関を通じて抗議するなど、外交による解決がそれなりに機能していたのです。もちろん、その時は、バルト諸国はEU加盟交渉中でEUも仲介役を果たしたこと、またロシアとアメリカの関係もそれほど悪くなかったことなど、ロシアを取り巻く国際環境も異なりました。しかし、それと比べると、2013年から14年のマイダン革命とそれに対するロシアの反応としてのクリミア侵攻やドンバスの人民共和国の建設、そして2022年のウクライナへの大規模侵攻というのは、程度も質も相当異なっていて、ロシアの対応が随分変わったという印象を私も持っています。それはなぜか、なぜここまで強硬になったのか、理由を検討する必要があると思います。

おそらくはいくつか理由があると思うのですが、一つはロシアに残された自分の勢力圏の中で一番重要なのがウクライナだった点があると思います。例えば軍事的にも黒海艦隊の問題もありますし、ロシアと接する国境線の長さや、あるいは黒海を通じた交易の問題などに関しても、ウクライナはロシアの戦略上の相当の要衝になっているのは間違いありません。また、旧ソ連のバルト三国や旧社会主義国のポーランドなどが、先にEU・

NATO に加盟してしまった後に、いままで残っていたウクライナまでロシアの影響圏から抜けるとまずいという順番の問題もあるだろうと思います。ロシア側としては、自分たちの世界が蚕食され、非常に追い詰められているという論調を張っています。最後に残ったウクライナを死守したいということなのかなと思います。他にも色々な理由が考えられます。これまでのウクライナの政権には親 EU 派と親ロシア派のどちらもあったわけですが、クリミアやドンバスが実質的なロシアの支配下に入って以降のウクライナでは、どうしても親 EU 派が勝ちやすくなります。親ロシア派の多いクリミアとドンバスがウクライナからなくなりますから、ウクライナ国内での親ロシア派の勢力がその分弱まり、ロシアの意向がなかなか通りにくくなったとも指摘されています。ミンスク合意が履行されない中での構造上の問題もあると思います。だからといって、ここで述べたことが、これほどまでに大規模な軍事侵攻を決断させた背景・理由として十分なのかとなると、他にもまだ色々ありそうな気はしています。

以上

参考文献

- Katarzyna Błachowska, *Narodziny imperium: rozwój terytorialny państwa carów w ujęciu historyków rosyjskich XVIII i XIX wieku*, Warszawa: Neriton, 2001
- Katarzyna Błachowska, *Wiele historii jednego państwa*, Warszawa: Neriton, 2009
- Faith Hillis, *Children of Rus': Right-Bank Ukraine and the Invention of a Russian Nation*, Cornell University Press, 2013
- Gerogiy Kasianov, *Memory Crash: The politics of History in and around Ukraine 1980s-2010s*, Budapest: CEU press, 2022
- Иван И. Лаппо. Западная Россия и ея соединение с Польшею в их историческом прошлом. Прага, 1924.
- Tadeusz A. Olszański, „Ukraińcy nie gęsi... Ustawa o języku państwowym Ukrainy”, *Komentarze OSW*, Ośrodek Studiów Wschodnich im. Marka Karpią, 2019-06-11, Nr 304
<https://www.osw.waw.pl/pl/publikacje/komentarze-osw/2019-06-11/ukraincy-nie-gesi-ustawa-o-jezyku-panstwowym-ukrainy> (2023-01-16)

- Tadeusz A. Olszański „Polityka historyczna Juszczeki – próba podsumowania”,
Tydzień na Wschodzie, 2010-01-27
<http://www.osw.waw.pl/pl/publikacje/tydzien-na-wschodzie/2010-01-27/polityka-historyczna-juszczeki-proba-podsumowania> (2023-01-16)
- Timothy Snyder, *The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine, Lithuania, Belarus, 1569–1999*, Yale University Press, 2004
- Timothy Snyder, *Bloodlands: Europe Between Hitler and Stalin*, Basic Books, 2010
- 『現代思想 特集ロシア』7月号、2014
- 『現代思想 ウクライナから問う』6月臨時増刊号、2022
- 『世界 ウクライナ侵略戦争—世界秩序の危機』No.957、2022
- 伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『新版世界各国史 ポーランド・ウクライナ・バルト史』山川出版社、1998
- アルフォンサス・エイディンタスほか、梶さやか・重松尚訳『リトアニアの歴史』明石書店、2018
- 黒川祐次『物語ウクライナの歴史』中公新書、2002
- 小山哲、藤原辰史『中学生から知りたいウクライナのこと』ミシマ社、2022
- ロバート・コンクエスト、白石治朗訳『悲しみの収穫 ウクライナ大飢饉—スターリンの農業集団化と飢饉テロ』恵雅堂出版、2007
- タラス・シェフチェンコ、藤井悦子訳『シェフチェンコ詩集』岩波書店、2022
- 塩川伸明『民族と言語—多民族国家ソ連の興亡 1』岩波書店、2004
- ティモシー・スナイダー、松井貴子訳『秘密の戦争—共産主義と東欧の20世紀—』慶應義塾大学出版会、2021
- 立石洋子『スターリン時代の記憶—ソ連解体後ロシアの歴史認識論争』慶應義塾大学出版会、2020
- 中井和夫『ウクライナ・ナショナリズム—独立のディレンマ』東京大学出版会、1998
- 橋本伸也「ロシアの近代化と西欧的知の移入・受容」『ロシア史研究』82、2008
- 橋本伸也『帝国・身分・学校—帝制期ロシアにおける教育の社会文化史』名古屋大学出版会、2010
- 橋本伸也『記憶の政治—ヨーロッパの歴史認識紛争』岩波書店、2016
- 橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題—ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房、2017
- 橋本伸也編著『紛争化させられる過去—アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』岩波書店、2018

- 服部倫卓、原田義也編著『ウクライナを知るための65章』明石書店、2018
- 早坂真理『ウクライナ―歴史の復元を模索する』リプロボート、1994
- 福岡千穂「「ハジャチ合意」(一六五八―五九年)にみるルテニア国家の創出」『史林』93-5、2010
- 福岡千穂『ブレスト教会合同』群像社、2015
- カタジナ・ブワホフスカ、小山哲訳「歴史をめぐる論争／同時代をめぐる論争―19世紀のロシアとポーランドの歴史家の解釈にみる旧リトアニア大公国領」『東欧史研究』35、2013
- テリー・マーチン、荒井幸康他訳『アフアーマティヴ・アクションの帝国―ソ連の民族とナショナリズム、1923年～1939年』明石書店、2011
- 松里公孝『ポスト社会主義の政治―ポーランド、リトアニア、アルメニア、ウクライナ、モルドヴァの準大統領制』ちくま書房、2021
- 三浦清美『ロシアの源流―中心なき森と草原から第三のローマへ』講談社、2003
- 村田優樹「革命期ロシアのウクライナ問題と近世ヘトマン領」『史学雑誌』130-7、2021
- 村田優樹「ロシア革命期ウクライナにおける民族属人自治」『ロシア史研究』105、2020
- 村田優樹「第一次世界大戦、ロシア革命とウクライナ・ナショナリズム」『スラヴ研究』64、2017
- 柳沢秀一「ソ連西方地域のソヴィエト化―西ウクライナを中心に」『ロシア・東欧学会年報』26、1997
- 柳沢秀一「「ウクライナ民族主義者組織(OUN)」と「ウクライナ蜂起軍(UPA)」のウクライナ独立国家構想とその戦略―対ソ政策と対ポーランド政策を中心に―」『現代史研究』50、2004
- 柳沢秀一「独ソ戦期ドイツ占領体制とウクライナ：「ウクライナ民族主義者組織(OVH)」の対独政策における「協力」と「抵抗」」『ロシア史研究』82、2008
- 吉岡潤「「民族の理論」によるポーランド共産主義者勢力の権力正当化の試み―インターナショナリズムとナショナリズムのはざままで(一九四四―四七年)」中山昭吉、松川克彦編著『ヨーロッパ史研究の新地平―ポーランドからのまなざし』昭和堂、2000
- 吉岡潤「ポーランド共産政権支配確立過程におけるウクライナ人問題」『スラヴ研究』48、2001
- 和田春樹編著『新版世界各国史 ロシア史』山川出版社、2002
- 渡辺克義編著『ポーランドの歴史を知るための55章』明石書店、2020

ロシアとウクライナとポーランド～その歴史的関係～

2023年8月31日 発行
発行者 岩手地域総合研究所
020-0021 盛岡市中央通2-8-21
TEL (FAX) 019-624-6715
e-mail i-chiikisouken@salsa.ocn.ne.jp
HP <http://isouken.org/>

印刷・製本 株式会社興版社



NPO法人岩手地域総合研究所